「日本経済新聞（夕刊）」　2015年8月7日（金）9面

日本流授業を輸出

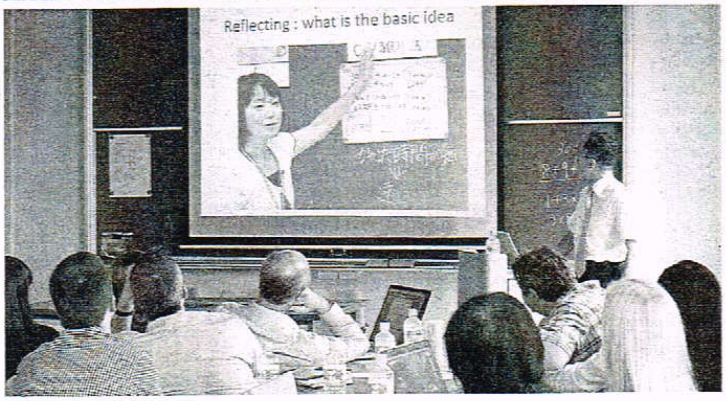
「教員同士の議論」新鮮

現場の教員による授業改善の活動など、日本の教育の長所を海外の教育関係者に伝える取り組みが盛んになっている。代表的なのが教員同士の議論を通じて授業の質を高める「授業研究」で、導入を試みる国が相次ぐ。日本政府や大学もこれからの国際貢献の一環として、国境を越えた「先生の学び合い」の充実に力を入れている。

6月下旬。米英両国やカタール、マレーシアなど6カ国で算数・数学教育に携わる教員、研究者ら27人が日本を訪れた。目的は東京学芸大が企画した、授業研究について学ぶプログラムへの参加。11日間の日程で7つの小中学校の授業を見学し、日本の専門家と指導法などを巡って意見を交わした。

一般に授業研究は①「分数の意味を理解させる」といった目標を立て指導案を作る②他の教員の前で研究授業をする③内容を批評し、結果を共有する――といった流れで行われる。一行は7月1日、東京都世田谷区立笹原小学校で、5年生を対象に行われた算数の研究授業に参加した。

授業のテーマは「小数の割り算」。大橋佑基教諭（38）は「1リットルで216円」「2リットルで420円」と、大橋教諭は一つ一つ、理由を聞いて板書した。



6カ国の教員らが参観し（写真上、7月1日、東京都世田谷区の区立笹原小学校）、**授業研究について話し合った**（2日、東京都小金井市の東京学芸大）

「1・6リットルで320円」という3本のペットボトル入りジュースを提示。最後のジュースの1リットル当たりの値段を求めるにはどうしたらいいか、と問いかけた。

「320÷1・6」「320×0・4」……。児童が自分なりに考えた答えを発表すると、大橋教諭は一つ一つ、理由を聞いて板書した。

「1・6で割ると、なぜ1リットル当たりの値段が出るのだろう」。次の時間に向けて子供たちの疑問が集約されたところで、授業を終えた。

海外からの参加者が注目したのが授業後の協議会だ。「1・6等分という言葉を使ったが、意味が分からない」「320÷1・6の計算はまだできないのに、この式で1リットル当たりの値段が出るのかという発問は適切か」……。大橋教諭には同僚から遠慮なく疑問がぶつけられる一方、「子供の疑問を子供が解決していくよい授業だった」と賛辞も寄せられた。

「海外の教員研修は教え方についてベテランなどが答えを与えるところから始まる。日本の授業研究は『思考力を高めるには？』といった疑問から始まり、1つの結論は出ない。だから継続性がある」。プログラムの責任者である学芸大の藤井斉亮教授（数学教育学）は授業研究の特質をこう説明する。

藤井教授によると、授業研究は米国で導入が始まり、ほかにも関心を寄せる国が増えている。1コマの授業で1つの問いを考える課題解決型の授業も海外の教員には新鮮で、模倣する動きがあるという。

プログラムの参加者からも日本式授業を評価する声が聞かれた。米シカゴで小中学校段階の子供が通う学校の校長を務めるマリエル・ロレアーノさん（40）は「校長として授業研究をどう支援していけばよいか分かった。現場の教員が協力して指導案をつくり、じっくり話し合うことが大事だ」と語った。

カタールで教師の職能開発などに携わるハナ・アシュワルさん（34）は「どう授業研究を導入していくか、国内で議論を盛り上げていきたい」と真剣な表情で話していた。

※著作権は日本経済新聞社に帰属し、記事、画像等の無断転載をお断りいたします。